歯科医学研究のススメ

愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座　教授
嶋　﨑　義　浩

【略歴】

1992年　九州歯科大学歯学部卒業
1996年　九州歯科大学大学院歯学研究科修了
1996年　九州大学歯学部予防歯科学講座助手
2007年　九州大学大学院歯学研究院口腔予防科学分野助教
2009年　九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学分野准教授
2013年　愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座教授（現在に至る）

歯科医学研究に携わっている若手研究者の皆さん、日々楽しく研究生活を送れていますでしょうか。研究を行っていくうえでは、思うようにいかないことや大変なことも多いと思います。ところで、若手研究者の皆さんが研究を行うきっかけやモチベーションは何でしょうか。私自身、1992年に歯学部（九州歯科大学）を卒業してから30年が経ちますが、ここでは私が研究を行うようになったきっかけと、私のこれまでの歯科医学研究活動を振り返り、研究との付き合い方の一例としてお読みいただければと思います。

私は歯学部卒業後に大学院に入学し、そこから私の研究生活が始まりました。大学生時代には研究者になることなど全く考えておらず、正直研究に興味はありませんでした。大学6年生の時、部活（サッカー部）のOBの十亀 輝先生（当時：福岡県庁職員、現：愛媛県開業）の勧めで、誘い文句は「大学院に残るとサッカーができて、バイトで学費や生活費を稼げて、博士の学位がもらえるぞ」というものでしたが、誘いに応じて十亀先生もかつて大学院生として所属した口腔衛生学教室の大学院生として大学院に入学しました。実際、大学院では、十亀先生が所属する社会人サッカーチームでサッカーができ、歯科健診や歯科診療のさまざまなアルバイトに行くことで自活し、また無事に博士（歯学）の学位をもらえたことから、十亀先生の誘い文句に間違いはありませんでした。

大学院生として所属した口腔衛生学教室の教授は竹原直道先生（現：九州歯科大学名誉教授）で、入学してしばらくは夕方になると竹原先生と同期の大学院生（私の他に3名いました）と研究室でビールを飲みながら談笑する日々を楽しく過ごしていました。その時の話題は研究に関係するものも多く、当時、東京の代々木公園や上野公園では変造テレホンカードを売るイラン人で溢れていることがニュースとなっていたことから「イラン人出稼ぎ労働者の口腔健康調査をしよう」ということになり、安細敏弘先生（現：九州歯科大学教授）を隊長とし、私を含めた同期の大学院生4名と東京へ調査に出向き、偶然出会ったイラン人の協力を仰ぎながら代々木公園と上野公園で調査を実施して、調査結果は安細先生が口腔衛生学会雑誌の論文に纏められました。そういった思いがけない経験は私にとってとても楽しい思い出となっており、竹原先生はこういう機会を我々大学院生に

与えて研究への興味を高めてくれていたのだと思います。竹原先生が教室の教員の先生や先輩大学院生に「あの研究はどうなっている。早く論文を書け。」とよく言われているのを見ていた私は、大学では研究論文を書くことがとても重要なのだと大学院時代にすり込まれたのだと思います。実際、大学教員や大学院生には、基本的な役割として研究論文を書くことが求められます。人は所属している環境からの影響を受けやすいため、私にとって研究を始めて最初に触れた大学院時代の経験は、現在までの私の研究生活のベースとなっています。

大学院を修了した1996年からは、九州大学歯学部予防歯科学講座に所属することになりました。講座の教授は古賀敏比古先生（2001年10月登山中の不慮の事故で逝去されました）で、古賀先生と竹原先生は九州大学でともに研究を行い非常に親しい関係であったこともあり、竹原先生の紹介で私は古賀先生のもとで研究を続けることになりました。古賀先生は研究に対して非常に厳しく、質の高い研究論文を出すことに強いこだわりを持たれていました。大学院時代とは研究室の雰囲気は違いましたが、よりよい研究を行うことを信条としていることは共通していて、私はとても研究環境に恵まれていたのだと思います。私が大学院生の時に学位論文の研究として行っていたのは疫学研究でしたが、九州大学では口腔細菌に関する実験的な研究が盛んに行われていたこともあり、私も古賀先生が行われていた齲蝕細菌に対する抗体を用いた齲蝕予防に関する研究のお手伝いをする機会を得て、大学院時代には経験しなかった研究にも携わることができました。

九州大学では、齋藤俊行先生（2006年より長崎大学歯学部教授、2022年9月病気のため逝去されました）と一緒に久山町研究などさまざまな疫学研究を行うことができました。当時の九州大学予防歯科では疫学研究はマイナーな存在でしたが、1998年に齋藤先生が書かれた肥満と歯周病の関連の論文（letter）がNew England Journal of Medicineに掲載されたことで、齋藤先生は国内外で注目される存在となり、講座の中で疫学研究がメジャーになることはありませんでしたが、疫学研究に対する周囲の認識が変わり、私も齋藤先生と協力しながら疫学研究の論文を書くことができました。齋藤先生はとても面白く、またお酒が大好きな方で、夜になるとお酒を飲みながら楽しそうにデータ分析や論文執筆を行われていました。九州大学で齋藤先生と席を隣り合わせて一緒に研究を行った日々は、私にとってとても楽しくかけがえのない思い出です。

九州大学予防歯科は、古賀先生が亡くなられた後、2003年7月より山下喜久先生が教授になられ、私は山下先生のもとで研究を続けることになりました。山下先生の専門分野は口腔細菌に関するものでしたが、疫学研究への理解や関心も高く、私が行っている研究について山下先生とディスカッションをしていると、私の考えとは異なる視点からデータの見方や研究結果の解釈などについてアドバイスをもらい、より興味深い内容の研究論文に纏めることができました。

その後2013年4月より、私は現在の愛知学院大学に移りましたが、それまでに接してきた指導者や上司の先生のだれもが、歯科医学研究に対する強い信念と使命感を持たれていました。私のこれまでの研究生活をあらためて考えると、常に周りの人から影響を受け、また助けてもらってきました。それは、指導者の先生や先輩方だけではなく、後輩や若い大学院生からもたくさんの刺激を受けました。現在、私は指導的な立場にあるため、これまでに私自身が受けてきたような影響や刺激を若手研究者や大学院生に与えていくことが求められるのだと思います。果たして私がその役割を十分に果たせているのか自信はありませんが、できるだけ私の責務を果たせるようにしたいと思っています。若手研究者の皆さんが研究を行ううえで、自身の研究について思いを巡らすことはとても大事なことですが、他の研究者が行っている研究にも関心を持ち、できるだけ多くの研究者と話をして周囲の意見を自分の研究にうまく取り入れることによって、皆さんの研究はより良いも

のになると思います。研究を行うなかで生じる疑問や問題点に対しては、ひとまず自分自身で調べ考えてみて、問題を解決できない場合は、詳しい人に頼り教えを請うことも必要だと思います。

若手研究者の皆さんが自身の研究テーマを考えるとき、数多ある研究テーマから自身が行う研究内容を絞り込むことはなかなか難しいことだと思います。研究者が100人いれば100通りの興味や考え方があり、それぞれが異なる研究を行うことによって研究の幅が広がることに繋がります。様々な研究が行われることは、その研究を見る側にとってもとても興味深いものです。私が行っている疫学研究においては、口腔の健康と全身の健康との関連についての研究は世間からの注目を集めやすいため、私自身もそのような研究を行うこともあります。一方で、社会にとって必要だと考えているものでも、地味な研究テーマだとあまり人目を引くことはないため、研究テーマを考える時に何を優先させるべきかジレンマを感じることがあります。若手研究者の皆さんも、研究を行ううえではできるだけ注目が集まるような研究を行いたいと考えるのではないでしょうか。もちろん、それはとても重要なことですが、人生100年時代を迎えようとしているいま、皆さんが行う研究が歯科界や社会にとってどのような意義があり、将来的にどんな展望があるのかを意識しながら研究を行ってもらいたいと思っています。また、若手研究者の皆さんが長く研究を続けていくためには、自分にとって興味があり、楽しいと感じられる研究を行うことがとても重要だと思います。

私の専門である口腔衛生学の研究分野は、富徳会から長年にわたり研究助成の支援を受けてきましたが、口腔衛生学の研究は歯科保健に関する社会環境の整備にとって大変重要な役割を果たしているものと思っています。口腔衛生学分野に限らず、歯科医学研究の推進は、歯科界だけではなく、人々が健康的な生活を送れる社会を実現するうえでとても重要であり、歯科医療や歯科保健の発展のためには歯科医学研究の下支えが不可欠です。近年の歯科医師国家試験の難化により、若い世代の歯科医師数が増えづらい状況において、研究者を志す歯科医師が減少していくことが懸念されますが、若手研究者の皆さんの活発な研究活動から得られた研究成果が、将来の歯科界の発展や社会への貢献に繋がるとともに、皆さんに続く若手研究者が歯科医学研究に興味を抱くきっかけになることを期待しています。

1995年5月 九州歯科大学口腔衛生学教室・九州大学歯学部予防歯科学講座合同医局旅行（雲仙）
最前列左から3人目（竹原先生）、最前列右から4人目（古賀先生）、2列目右から2人目（齋藤先生）、3列目右から3人目（山下先生）、3列目左端（十亀先生）、最後列左から2人目（筆者）